

第13回 生産マスター検定 ベーシック級の結果振り返りと現場の活動から

生産マスター検定委員 石山 真実

■ 第13回検定の結果を振り返る

残念ながら、前回(第12回)よりも低い合格率となりました。

その中で「品質」に関する問題の正答率は少し上がりましたが、それでも「コスト」とともに、全体と比較すると低い状況にあります。

毎回いえることですが、やはり多くの皆さんにとって、計算問題が苦手分野のようです。「品質」に関する設問では「品質コスト体系の計算」、「コスト」に関する設問では「編成ロスの計算」「設備の総合効率の計算」などが不得意のようです。

「品質」は、お客様が皆さんの製品を購入するか判断する時の最重要項目になります。計算問題はもちろんですが、そのほかの内容も、もう一度よくテキストを確認していただき、日々の生産で十分に意識していただけたいと思います。

「コスト」では、特に現場でのロスを見つける方法として、色々な分析やそのための計算が必要になってきます。ロスの少ない良い現場を作っていくために、こちらでも再度テキストを勉強しましょう。

また勉強する際には、それらの内容を、どのように現場に活かすべきかを意識しながら、改めて学習することで、理解レベルがさらに向上できると思います。

■現場の活動から

私がコンサルティングをしている会社では、改善案を検討する際に「3人寄れば、文殊の知恵」ということわざの話をよくします。ご存知の方も多いと思いますが、その意味は、1人で考えるよりみんなで考えた方がいい知恵が出る、というものです。これは、現場で改善を考える時にも同じことが言えます。ちなみに文殊とは、知恵をつかさどる菩薩のことだそうです。

さて、それではなぜ1人より皆で考えた方が、いい改善案が出るのでしょうか。

ここに、改善案を検討するときのポイントがあるのです。今まで思いも付かなかったような案をいきなり出そうと思っても、なかなか出るものではありません。いい案の多くは、他の人が出した案をヒントに、さらなる案を思いつくことから始まります。

(一社) 人材開発協会

その案をヒントにさらなる案→その案をヒントにさらなる案→・・・というようにいい案が育っていくのです。複数のメンバーで考えると、このさらなる案が1人より出やすくなるので、「3人寄れば、文殊の知恵」となるわけです。

ここで大変重要なことが2つあります。

1つは、できるだけ「突拍子もない案を歓迎する」ということです。最初のきっかけ案も、それをヒントにしたさらなる案も、突拍子もない方が「今まで思いも付かなかった案」を生み出す可能性が高まります。

そしてもう1つの重要なことですが、色々な案出しの段階では「絶対に評価や否定をしてはいけない」ということです。改善案を検討しているときに、突拍子もない案を出すというのは、大変勇気がいりますよね。せっかく勇気を振り絞って出した案を、まわりのメンバーから「それは無理でしょ～」とか、「それはお金がかかりすぎるよね」などと否定的に評価されたらどうでしょうか。自分も、まわりのメンバーも二度と突拍子もないことは発言しなくなってしまいますね。

実はこれこそが、いい案が出なくなる最大の要因なのです。ついつい言ってしまうがちな否定的な言葉を絶対に出さないことが、いい案を生み出すことにつながります。

皆さんの現場で改善案を検討するときに、「この時間は絶対に否定的な発言をしない」というルールを決めて、むしろ「それはおもしろいね～」、「それは思いつかなかったよ」と言ってみましょう。きっと今までに無い面白い案がたくさん出てくるかと思います。ぜひ実践してみることをお勧めします。

以上